

卷第四

熱鬱

熱鬱者、邪熱入^レ裏、不^レ與^レ物相得^レ、唯鬱^レ著各位^レ者、是也、其證不^レ一、有^レ表未^レ解、膈有^レ熱者^レ、有^レ下^レ表既解、熱灼^レ膈間^レ者^レ、有^レ心下熱結者^レ、有^レ腸中熱壅者^レ、皆是少陽之類變爾、蓋熱偏在^レ一處^レ、故不^レ耐^レ白虎之大寒^レ、且其無^レ所^レ得、亦非^レ吐下所^レ適、是以制^レ苦寒之劑^レ、而爲^レ之治^レ矣、^更有^レ上熱下冷輕證^レ、併隸^レ于斯^レ、有^レ表未^レ解、膈有^レ熱者^レ、何、如^レ葛根黃芩黃連湯證^レ、是也、此表未^レ解、故汗出、熱犯^レ上焦^レ故喘、

熱鬱とは、邪熱が裏に入り、物と相得^{あたら}ず、唯各位に鬱著しき者、是也、其證一にあらざ、表未だ解せず、膈に熱有る者有り、表既に解し、熱が膈間に灼^盛なる者有り、心下熱結者有り、腸中熱壅^{ふさ}ぐ者有り、皆是少陽の類變爾^{強調}、蓋し熱が一處に偏在、故に白虎の大寒に耐えず、且つ其得る所無し、亦吐下の適する所に非ず、是以て苦寒の劑で制して、之が治と爲す矣、^更に上熱下冷の輕證有り、併せて斯^{ここ}に隸^分屬す、表未だ解せず、膈に熱有る者有り、何ぞ、*葛^葛根^根黃^黃芩^芩黃^黃連^連湯證の如き、是也、此表未だ解せず、故に汗出、熱が上焦を犯す故に喘す、

*太陽病中四條「太陽病 桂枝証 医反下之 利遂不止 脈促者 表未解也 喘而汗出者 葛根黄連黄芩湯主之」

言^レ喘而汗出^レ、其汗似^レ爲^レ喘而出^レ、然推^レ其病^レ、恐不^レ然、

「喘而汗出」と言う、其汗は喘が爲に出るに似る、然れども其病を推^推量すに、恐らく然らず、

且熱勢併及^レ經^レ下之胃^レ、故利遂不^レ止、所^レ以不^レ用^レ桂者、恐^レ礙^レ裏熱^レ也、

且つ熱勢併^{みな}下を經^へり胃に及ぶ、故に利遂^遂に止まず、桂を用いざる所以は、裏熱を礙^碍・とどめるを恐れる也、

此方移治^下滯下有^レ表證^レ、而未^レ要^レ攻下^者上、甚效、内臺方議曰、又能治^レ嗜^レ酒之人熱喘者^レ、又千金、治^下夏月傷寒、四肢煩疼發熱、其人喜煩嘔逆、劇如^レ禍崇^レ、寒熱相搏、故令^中喜煩^上、七物黃連湯、於^レ本方^レ、加^レ茯苓、芍藥、小麥^レ、聖濟、治^レ胃實熱、煩渴吐逆^レ、葛根湯、於^レ本方^レ、去^レ黃^黃芩^レ、加^レ半夏、生薑、竹茹^レ、

此方移^旁・かたわら滯^下病疾に表證有りて、未だ攻下を要せざる者を治す、甚だ效^効く、内臺方議曰く、又能く酒を嗜む人で熱喘者を治す、又千金、夏月傷寒、四肢煩疼發熱、其人喜^よく煩嘔逆、劇しきこと禍^禍崇^盛の如く、寒熱相搏、故に喜煩せしむるを治す、七物黃^黃連湯、本方に、茯苓、芍藥、小麥を加える、**聖濟**、胃實熱、煩渴^渴吐逆を治す、葛^葛根湯、本方より、黃^黃芩^レを去り、半夏、生薑、竹茹を加える、

有^下表既解、熱灼^レ膈間^レ者^レ、何、如^レ梔子豉湯證^レ、是也、太陽病誤汗吐下、邪氣乘入、或陽明病下早、熱逆^レ于上^レ、俱能致^レ之、蓋不^レ比^レ結胸之邪藉^レ物實^レ、啻是邪熱熏^レ灼上焦^レ者耳、其爲^レ證也、曰虛煩不^レ得^レ眠、此其輕者也、

表既に解け、熱が膈間^{胸腹の間}に灼^さかん^なさまする者有り、何ぞ、梔子豉湯證*の如き、是也、太陽病誤汗吐下、邪氣乘入、或いは陽明病下すこと早く、熱が上に逆^{ホウ}・はしり、俱に能く

之を致す、蓋し結胸の邪が物に藉かり實みちるに比ひとしからず、畜ただ是邪熱上焦に熏灼する者耳、其證を爲す也、曰く虚煩不得眠、此其輕き者也、

*太陽病中四十八條「發汗吐下後 虚煩不得眠 若劇者 必反覆顛倒 心中懊憹 梔子豉湯主之 若少氣者 梔子甘草鼓湯主之 若嘔者 梔子生薑豉湯主之 」

太陽病中四十九條「發汗 若下之 而煩熱胸中窒者 梔子豉湯主之 梔子 香豉 」

太陽病中五十條「傷寒五六日 大下之後 身熱不去 心中結痛者 未欲解也 梔子豉湯主之」

太陽病中五十一條「傷寒下後、心煩、腹滿、臥起不安者、梔子厚朴湯主之、 梔子 厚朴 枳實 」

太陽病中五十二條「傷寒、醫以丸藥大下之、身熱不去、微煩者、梔子乾薑湯主之、 梔子 乾薑 」

陽明病四十二條「陽明病 脈浮而緊 咽燥口苦 腹滿而喘 發熱汗出 不惡寒反惡熱 身重 若發汗則躁 心憤憤反讖語 若加溫針 必怵惕煩躁 不得眠 若下之則胃中空虛 客氣動膈 心中懊憹 舌上胎者 梔子豉湯主之」

陽明病四十七條「陽明病 下之 其外有熱 手足溫 不結胸 心中懊惱 飢不能食 但頭汗出者 梔子豉湯主之」

厥陰病四十九條「下利後更煩 按之心下濡者 爲虚煩也 宜梔子豉湯」

陰陽易差後勞復病二條「大病差後勞復者、枳實梔子湯主之、 枳實 梔子 豉 」

虚煩之虚、恐非陽虚之義、蓋是心腹無實結之謂、即對結胸及胃實之鞭滿而言、厥陰篇、下利後更煩、按之心下濡者、爲虚煩也條、柯氏注甚晰、此證鬱灼猶輕、故未至懊憹也、

虚煩の虚、恐らく陽虚の義に非ず、蓋し是心腹に實結無きの謂、即ち結胸及び胃實の鞭滿に對して言う、厥陰篇「下利後更煩、按之心下濡者、爲虚煩也、」の條、柯氏注甚だ晰あきらか、此證鬱灼猶輕い、故に未だ懊憹に至らざる也、

曰反覆顛倒、心中懊憹、此其重者也、

曰く「反覆顛倒、心中懊憹」此其重き者也、

張錫駒曰、即不得眠之甚、而爲之輾轉反側也、按心中懊憹、爲梔豉正證、陽明及結胸、並亦有之、然別有眞的、

張錫駒曰く、即ち眠を得ざるの甚だしきにて、之を爲すに輾轉^{寝返りをうつ}反側する也と、按案ずるに心中懊憹^{胸中煩のはなはだしき・苦悶}「傷寒論入門」、梔豉正證と爲す、陽明及結胸、並亦之有り、然れども別に眞的^{眞実}有り、

曰胸中窒、此其鬱稍甚者也、

曰く「胸中窒^{胸郭内に窒塞するがとき感を感じる}」此其鬱稍^{やや}甚しき者也、

徐大椿曰、煩熱且窒、較前虚煩等象爲稍實、按上條言發汗吐下後、此條言汗下不言吐、想吐最虚胸、故吐後邪陷、則不至此鬱甚乎、否則承上而省文也、

徐大椿^{「傷寒類方」}清、煩熱且つ窒^{ふさがり}、前の虚煩等の象^{シヨウ・形状}に較べて稍實と爲すと曰う、按案ずるに上條は發汗吐下後を言い、此條は汗下を言い吐を言わず、想うに吐は最も胸を虚す、故に吐後邪陷^{おちい}れば、則ち此鬱甚だしきに至らず乎、否則^{しからざれば}上を承うけて文を省く也、

○煩熱、即虚煩不得眠之互詞、攷煩、本熱悶之義、故三陽皆有煩者、又假爲苦惱難忍之貌、如疼煩煩疼之煩、是已、如少陰厥陰之煩、亦是也、成氏誤以煩熱爲

表熱、以_レ煩疼_レ爲_レ熱疼、至_レ閔氏明理論_レさん補、則引_レ虻厥之煩、以駁_レ成氏_レ曰、煩者、不_レ能_レ安靜_レ之狀、較_レ躁則稍輕焉、可_レ下兼_レ寒熱_レ而論_レ云云、其說頗辨、然猶未_レ爲_レ當、

○煩熱、即ち虚煩眠るを得ずの互^かかりあう詞、攷^考えるに煩、本熱悶の義、故に三陽皆煩なる者有り、又假^{かり}に云々とすれば苦惱^悩忍び難き貌^かたちと爲す、疼煩煩疼の煩の如き、是已^{のみ}、少陰厥陰の煩の如き、亦是也、成氏誤つて煩熱を以て表熱と爲し、煩疼を以て熱疼と爲す、閔氏明理論^{さん}補に至れば、則ち虻^回厥の煩を引き、以て成氏に駁^反論曰く、煩とは、安靜能わざるの狀、躁に較べれば則ち稍軽い焉、寒熱を兼ねて論ずるべし云云、其說^説頗^すこぶる辨^わきまえる・しらべている、然れども猶未だ當を爲さず、

曰心中結痛、此其鬱最甚者也、

曰く「心中結痛」此其鬱最も甚だしき者也、

徐椿曰、結痛^鬱甚_レ於_レ室_レ矣、按此以_レ大下_レ、邪激_レ聚_レ胸_レ、故爲_レ結痛_レ、其不_レ言_レ汗吐_レ者、以_レ吐_レ最_レ虚_レ胸、發汗亦有_レ外疎_レ之意_レ、故不_レ至_レ此鬱甚_レ乎、否則亦是省_レ文者也、又此證最疑_レ於_レ結胸_レ、唯心下_レ鞭濡_レ爲_レ分、

徐大椿、結痛は^鬱更に室^於より甚だしき矣と曰う、按^案ずるに大下を以て、邪が胸に激しく聚^あつまる、故に結痛を爲す、其汗吐を言わざるは、吐最も胸を虚し、發汗亦外に疎^とおるの意有るを以てす、故に此鬱甚だしきに至らず乎、否則^しからざれば亦是文を省^はぶく者也、又此證最も結胸を疑う、唯心下鞭濡で分^わかれると爲す、

蓋輕重雖不同、而情機則無_レ異、故均主_レ梔子豉湯_レ、以涼_レ解_レ之_レ矣、

蓋し輕重同じからずと雖も、而^しかして情機^{*}則ち異なる無し、故に均^ひとしく梔子豉湯を主とし、以て之を涼解す矣、

*情と機 情の言猶性のごとし、蓋し病の寒熱虚實、皆之を情と謂う也、蓋し邪の進退消長^衰えと榮、勢の緩急劇易^ゲキイ・激しいことと穏やかなこと、皆之を機と謂う也、(傷寒論述義の叙)

此方、爲_レ下涼_レ解_レ胸中鬱熱_レ之正劑_レ、梔子苦寒、能清_レ熱毒_レ、與_レ芩連_レ相近、而服_レ之必戀_レ膈、是以清_レ上之功、最其所_レ長、故以爲_レ君、後人用治_レ胸痺_レ、亦此意也、香豉、本草稱_レ味苦寒無_レ毒、又殺_レ六畜胎子諸毒_レ、金匱治_レ中毒_レ、多_レ用_レ此者_レ、並足_レ以_レ見_レ其亦爲_レ清涼之品_レ、況其臭烈、泥_レ膈殊甚、故住_レ梔子之力_レ、久留_レ胸中_レ、是以二味相得、而能爲_レ對_レ證之方_レ矣、本草豉條、陶隱居曰、好者出_レ襄陽錢塘_レ、香美而濃、然古者臭香互稱、香豉之香、恐非_レ芳香之謂_レ也、按_レ以_レ臭_レ爲_レ香、訓義反覆用_レ之、見_レ郭璞方言注_レ、抑本湯之非_レ吐藥_レ、既有_レ詳辨_レ、且吐本涌_レ實、今此證無_レ物相得實_レ、何用_レ吐爲、是其理最彰著矣、

此方、胸中鬱熱を涼解するの正劑を爲す、梔子苦寒、能く熱毒を清す、芩連と相近くして、之を服すと必ず膈に戀^恋・執着、是以上を清するの功、最も其長ずる所、故に以て君と爲す、後の人用いるに胸痺を治す、亦此意也、香豉、本草^{「本草經集注・名醫別錄」}味苦寒無毒、又六畜胎子諸毒を殺^除くと稱^いう、金匱^{*}中毒を治す、多く此を用いるは、並以て其亦清涼の品を爲すと見^しるに足る、況^いわんや其臭烈^はげしい、膈に泥^こだわる殊に甚だしき、故に梔子の力に住み、久しく胸中に留^留まる、是以て二味相得て、能く證に對するの方を爲す矣、本草^{*}

草經集注 豉條、陶隱居曰「好者襄陽錢塘に出る、香美にして濃」然れば古き者臭香互稱、香豉の香、恐らく芳香の謂には非ざる也、按ずるに臭を以て香りと爲す、訓義反覆之を用いる、郭璞^{カクハク・晋}の人方言注を見よ、抑^{そも}本湯之れ吐薬に非ず、既に詳辨有り、且つ吐本實を涌^{涌・ワ・あふれる}く、今此證物相得て實する無し、何ぞ吐を用いるを爲す、是其理最も彰著^{ショウウチョ・顯著}矣、

*金匱禽獸魚虫禁忌二十四「治食馬肉中毒欲死方、 香豉・杏仁」

○崔氏黃連解毒湯、爲_清膈之神^神方_方、實自_{梔子豉湯}變來者也、

○崔氏黃連解毒湯、膈を清するの神^神方を爲す、實に梔子豉湯自より變來する者也、

*外臺秘要崔氏方黃連解毒湯（黃連・黃芩・黃柏・山梔子）

其煩熱、身熱不^レ去、及其外有^レ熱、手足溫等、並内熱外熏之候、非_{表未}解也、
其煩熱、身熱去らず、及び其外に熱有り、手足溫等、並内熱外熏の候、表未だ解せざるに非ざる也、

此諸證、成氏注爲^レ妥、宜^レ參、注家或以爲_{表未}解、又以_發汗有_用豉者_遂以_{上方}爲^レ兼_{微汗}、恐不^レ然、

此諸證、成氏注を妥と爲す、宜しく參すべし、注家或いは以て表未だ解せずと爲す、又發汗に豉を用いる者有るを以て、遂に上方を以て微汗を兼ねると爲す、恐らく然らず、

至_{其有}兼者_如梔子甘草豉湯證_是胃氣不^レ足、故少氣也、如_{梔子生薑豉湯證}、是熱迫_{其飲}、故嘔也、

其兼有る者に至り、梔子甘草豉湯證の如き、是胃氣不足、故に少氣^{呼吸が微少で発言の不明瞭になる}場合「傷寒論入門」する也、梔子生薑豉湯證の如き、是熱が其飲に迫る、故に嘔する也、

此與_{小柴胡之嘔}相似、

此小柴胡の嘔と相似る、

如_{梔子厚朴湯證}、是下後兼_{胃氣壅滯}、以爲_{中滿}者也、

梔子厚朴湯證の如き、是下後胃氣壅滯を兼^{あわせて}、以て中滿^{腹滿}を爲す者也、

此方不^レ用^レ豉者、豈畏_{其泥戀助}壅乎、

此方豉を用いざるは、豈其泥戀^{泥膈殊甚}が壅を助けるを畏れる乎、

如_{梔子乾薑湯證}、是丸藥大下兼中焦生^レ寒者也、

梔子乾薑湯證の如き、是丸藥大下兼^{あわせ}中焦に寒を生じる者也、

此條文略、姑就_{方意}攷^レ之、當_{他有}胃寒證候_要邪本不劇、故被_{誤治}、不^レ至_{大逆}、故煩既微、而胃寒亦輕、是以僅須_{梔子乾薑}而足矣、

此條文略、姑^{しばらく}方意に就いて之を攷^考するに、當に他に胃寒證候有るべし、要するに邪本^元劇しからず、故に誤治を被^こおむるも、大逆^逆には至らず、故に煩既に微にして、胃寒亦軽く、是以て僅かに梔子乾薑を須^{もち}いて足る矣、

○王氏以_{丸藥}爲_{神丹甘遂}、當^レ攷、

○王氏丸藥を以て神丹^{神仙の靈藥}の甘遂と爲す、當に攷^考すべし、

此二證即係_{虛實之分}矣、如_{枳實梔子湯證}、蓋梔子厚朴湯之一類也、有_{心下熱結者}、

何、如_二大黃黃連瀉心湯證_一、是也、此邪熱乘_二誤下之勢_一、入而著_二心下_一、以爲_レ痞者、唯其無_レ飲、故按_レ之濡、然鬱結稍重、故芩連之涼、兼以_二大黃_一、而麻沸湯泡用、蓋意在_二疎泄_一、而不_レ在_二峻利_一矣、

此二證即ち虚實の分_{わか}つに係_{つな}がる矣、枳實梔子湯證の如き、蓋し梔子厚朴湯の一類也、心下熱結者有り、何ぞ、大黃黃連瀉心湯證*の如き、是也、此邪熱が誤下の勢に乘じ、入りて心下に著_つき、以て痞を爲す者、唯其飲無し、故に之を按ずるに濡_軟、然れども鬱結稍重、故に_{黄芩黄連}の涼、兼_あわせるに大黃を以てす、麻沸湯泡_あわ用す、蓋し意_こころは疎_疎・_おおまかな泄_なに在りて、峻_峻に在らず矣、

*太陽病下二十七條「心下痞、按之濡、其脈關上浮者、大黃黃連瀉心湯主之、大黃 黃連 右二味以麻沸湯二升漬温、須臾絞去滓」

脈浮而緊、而復下_レ之、緊反入_レ裏、則作_レ痞、按_レ之自濡、但急痞耳、蓋言_二此證_一也、痞證因_二飲結_一者、必云_二痞鞭_一、此並云_レ濡以爲_二其別_一、且氣痞之稱、似_レ言_二但是熱結、而非_二飲結_一、方氏以_二本方證_一、次_二彼條後_一曰、此申_二上條_一、言_レ脈以出_二其治_一、脈見_二關上_一者、以_二痞在_二心下_一也、以_二氣痞_一而濡、所_二以浮_一也、然痞之濡、由_二熱聚_一也、故用_二黃連_一清_二之於上_一、聚雖_レ氣也、痞則固矣、故用_二大黃_一傾_二之於下_一、此說_説稍允、又成氏曰、以_二沸湯_一漬服者、取_二其氣薄_一、而泄_二虛熱_一、尤氏曰、成氏所_レ謂虛熱者、對_二燥屎_一而言也、非_二陰虛陽虛之謂_一、蓋熱邪入_レ裏、與_二糟粕_一相結、則爲_二實熱_一、不_レ與_二糟粕_一相結_上、即爲_二虛熱_一、本方以_二大黃黃連_一爲_レ劑、而_レ不用_二枳實芒消_一者、蓋以泄_レ熱、非_二以蕩_レ實也、周_周氏曰、以_二麻沸湯_一漬_レ之、其氣味之出、輕而且活、以_二大力之體_一、爲_二輕清之用_一、非_二聖人_一其孰能_レ之、二說_説亦似是、

*「脈浮而緊、而復下之、緊反入裏_予期に反し脈をして緊ならしめている病原が裏に侵入「傷寒論入門」、則作痞、按之自濡_軟、但急痞耳、」蓋し此證_{大黃黃連瀉心湯}を言う也、痞證は飲結に因る者、必ず痞鞭と云う、此並濡と云い以て其別を爲す、且つ氣痞の稱、但し是熱結にして、飲結に非ざるを言うに似る、方氏本方證を以て、彼條後に次_つぐと曰う、此上條に申_かさねて、脈を言つて以て其治を出す、脈が關上に見_あられるは、痞が心下に在るを以てなり也、氣痞以てして濡、所以浮也、然れば痞の濡、熱聚に由_よる也、故に黃連を用い之が上を清す、聚_あつまるは氣と雖も也_や、痞は則ち固い矣、故に大黃を用い之を下に傾_だしつくす、此說_説稍允_當を得る、又成氏曰く、沸湯を以て漬け服する者、其氣薄くして、虚熱を泄_くだすを取る、尤氏曰く、成氏謂う所の虚熱は、燥屎に對して言う也、陰虚陽虚の謂に非ず、蓋し熱邪が裏に入り、糟粕_かす・_宿便と相結すれば、則ち實熱と爲す、糟粕と相結せざれば、即ち虚熱と爲す、本方大黃黃連を以て劑と爲して、枳_実厚朴芒消を用いざるは、蓋し以て熱を泄_もらすも、以て實を蕩_のぞくに非ざれば也、周_周氏曰く、麻沸湯を以て之を漬け、其氣味の出るや、軽くして且つ活_いきお_いがある、大力の體を以て、輕清の用を爲す、聖人に非ざれば其孰_たれぞ之を能くするや、二說_説亦是に似たり、

*太陽病下二十四條「脈浮而緊、而復下之、緊反入裏、則作痞、按之自濡、但氣痞耳、」

○錢氏辨_二承氣、陷胸、十棗、及此湯之異_一、當_二併攷_一、

○錢氏承氣、陷胸、十棗、及び此湯の異を辨ずる、當に併攷すべし、

如_レ附子瀉心湯證_一、是前證而兼_二表陽虛_一者、其病表裏異_レ情、故治亦涼溫併行焉、

*附子瀉心湯證の如き、是前證にて表陽虛を兼ねる者、其病表裏で情を異にする、故に治亦涼溫併行す焉、

*太陽病下二十七條「心下痞 而復惡寒 汗出者 附子瀉心湯主之 大黃 黃連 黃芩 附子」

此條、錢氏以_レ命門虛_一爲_レ說、近_レ鑿、尤氏曰、此卽_二上條_一、而引_二其說_一、謂心下痞按_レ之濡、關脈脈浮者、當_下與_二大黃黃連瀉心湯_一、瀉_中心下之虛熱_上、若其人復惡寒而汗出、證兼_二陽虛不足_一者、又須_下加_二附子_一、以復_中表陽之氣_上、乃寒熱並用、邪正兼治之法也、又曰、此證、邪熱有_レ餘、而正陽不_レ足、設治_レ邪而遺_レ正、則惡寒益甚、或補_レ陽而遺_レ熱、則痞滿愈增、此方、寒熱補瀉、並投互治、誠不_レ得_レ已之苦心、然使_レ無_二法以制_レ之、鮮_レ不_二混而無_レ功矣、方以_二麻沸湯_一漬_二寒藥_一、別煮_二附子_一取_レ汁、合和與服、則寒熱異_二其氣_一、生熟異_二其性_一、藥雖_二同行_一、而功則各奏、乃先聖之妙用也、此解甚覺_二精暢_一、又大黃附子湯、寒熱融和、自爲_二溫利_一、宜_二分別看_一、

此條、錢氏命門^{腎臟機能・生命の根本}虛を以て說と爲す、尤氏曰く、此上條に卽^即して、其說^說を引く、謂^{おも}へらく「心下痞、按之濡、關^上脈脈浮者」當に大黃^黃黃^黃連瀉心湯を與え、心下の虚熱を瀉すべし、若し其人「復惡寒而汗出」證が陽虚不足を兼ねる者、又須からく附子を加え、以て表陽の氣を復^{つぐなう}べし、乃ち寒熱並用、邪正^氣兼治の法也、又曰く、此證、邪熱餘有りて、正陽不足、設^{もし}邪を治して正^氣を遺^{わす}すれば、則ち惡寒益^{ますます}甚だし、或いは陽を補つて熱を遺せば、則ち痞滿愈^{いよいよ}増^増す、此方、寒熱補瀉、並び投^{投与}互いに治す、誠に已^やもう得ざるの苦心、然り法以て之を制する無からしむ、混ぜて功無きにあらざるは鮮^{あきら}か矣、方は麻沸湯を以て寒藥^{大黃・黃連・黃芩}を漬け、別に附子を煮て汁を取る、合和^{和合}與^{とも}に服すれば、則ち寒熱は其^氣ちから^いき^{おい}を異にし、生熟は其^性本^質を異にする、藥同行すると雖も、而^{しか}して功は則ち各^{べつべつ}に奏^なしとける、乃^{それ}先聖の妙用也、此解甚だ精^くわしく暢^{ゆきわたる}を覺える、又大黃附子湯*、寒熱融和、自ら溫利を爲す、宜しく分別看るべし、

*金匱腹滿寒疝宿食病十「脇下偏痛、發熱、其脈緊弦、此寒也、以溫藥下之、宜大黃附子湯、 大黃 附子 細辛」

○中西惟忠曰、此方煮_二附子_一、不_レ言_二水率_一、疑是脫文、

○中西惟忠曰く、此方附子を煮るに、水率を言わずと、疑うに是脫文、

有_二腸間熱壅者_一、何、如_二白頭翁湯證_一、是也、此熱壅下迫、故爲_二下重_一、蓋與_二腸澼_一同_レ局者矣、

腸間熱壅者有り、何ぞ、白頭翁湯證の如き、是也、此熱壅下迫、故に下重^{裏急後重・しぶりばら}を爲す、蓋し腸澼^{痼病}と局^{形勢}・ようすを同じくする者矣、

*厥陰病四十五條「熱利下重者、白頭翁湯主之、 白頭翁 黃蘗 黃連 秦皮」

先兄曰、白頭翁湯、治_二熱利下重_一、意在_下于清_二下焦之熱_一、緩其窘迫_上、仍以_二白頭翁_一、涼_二腸熱_一爲_レ君、秦皮亦清_レ熱利_レ竅、俱合_二之黃連蘗皮_一、清利以瀉_レ之、蓋熱毒之氣、客_二于下焦_一、欲_レ僂不_レ能、重滯以迫_二于後竅_一、故其方非_下治_二下焦腸滑_一之比_上、而注家執_二

苦以堅^レ之之語^一、可^レ謂^レ味矣、

先兄^{亡き兄・多紀元簡の嫡子の兄元胤}曰く、白頭翁湯、熱利下重を治す、意は下焦の熱を清、其窘迫^キンバク・逼迫を緩めるに在り、仍^よつて白頭翁を以て、腸熱を涼^冷し君と爲す、秦皮亦熱を清し竅^キヨウ・孔を利す、俱に之に黃連・檗皮^{檗木(ハクボク)・黃柏}を合わせ、清利以て之を瀉す、蓋し熱毒の氣、下焦に客し、僂^便を欲するに能わず、重滯以て後竅に迫る、故に其方下焦腸滑を治するの比^同に非ず、而^{しか}して注家苦以て之を堅くするの語^かたりを執^とる、味と謂うべき矣、

有^上熱下冷輕證^者、何、蓋上熱下冷、實厥陰之機、然^變更有^下未^レ至^其甚^一、猶屬^少陽之類變^者、此所^レ列是已、如^一梔子乾薑湯證^一、是自^誤下^一而變者也、

上熱下冷の輕證有るは、何ぞ、蓋し上熱下冷、實に厥陰の機、然れども^變更に未だ其甚しきに至らず、猶少陽の類變に屬する者有り、此列^つらねる所是已^{のみ}、梔子乾薑湯證の如き、是誤下に自^よりて變わる者也、

說^見于上^一、

說^は上を見よ、

如^一黃^黃連湯證^一、是從^素有^之寒熱^一、而膈胃異^レ病者也、

黃^黃連湯證の如き、是素^もとより有る寒熱に従つて、膈胃で病を異にする者也、

*太陽病下四十五條「傷寒胸中有熱 胃中有邪氣 腹中痛欲嘔吐者 黃連湯主之

黃連 甘草 乾薑 桂枝 人參 半夏 大棗 』

此方、自^半夏瀉心^一變來、然彼冷熱在^一位^一、而相結、此冷熱異^其位^一、故彼則要^藥性溫涼混和^一、所^以再煎^一、此則要^溫涼各別立^レ功、所^以淡煮而不^再煎^一、尤氏曰、此蓋痞證之屬、多從^寒藥傷^中後^得之、本文雖^不言及^一、而其爲^誤治後證^一可^レ知、故其藥亦與^瀉心^一相似、而多^桂枝^一耳、此說非^是、

此方、*半夏瀉心自^より變來、然れども彼冷熱一つの位に在りて、相結す、此冷熱其位を異にする、故に彼は則ち藥性溫^温涼混和を要す、再煎する所以、此則ち溫^温涼各別に功を立てるを要す、淡^う煮にて再煎せざる所以、尤氏曰く、此蓋し痞證の屬、多く寒藥は中を傷る後之を得るに従る、本文言及せざると雖も、而して其誤治後證を爲すを知るべし、故に其藥亦瀉心と相似て、桂枝^三兩を多くする耳、此說^是に非ず、

*太陽病下二十二條「傷寒五六日 嘔而發熱者 柴胡湯証具 而以他藥下之 柴胡證仍在者 復與柴胡湯 此雖已下之不為逆 必蒸蒸而振 却發熱汗出而解 若心下滿而鞭痛者 此為結胸也 大陷胸湯主之 但滿而不痛者 此為痞 柴胡不中與之 宜半夏瀉心湯 半夏 黃芩 乾薑 人參 甘草 黃連 大棗 七味以水一斗煮取六升去滓再煎取三升 』

○此方、愚常用治^霍亂吐瀉腹痛^一、應效如^神、蓋以^其逐^レ邪安^正、能和^陰陽^一也、

○此方、愚^私常用し霍亂吐瀉腹痛を治す、應に效^効・ききめは神^神の如し、蓋し其邪を逐^逐い正を安んじ、能^{よく}陰陽を和するを以て也、

2010/4/30